

黄金律(ゴールデン・ルール)

マタイの福音書 7章 12節

はじめに

私がウェルカム・サンデーで説教をする時は、いつもイエス様が山の上で弟子たちや群衆に向けて語った説教、いわゆる「山上の説教」からお話しています。今日の聖書箇所は、「黄金律」(ゴールデン・ルール)と呼ばれるもので、イエス様の教えの中でも最も有名な教えの一つです。

1. 黄金律(ゴールデン・ルール)と白銀律(シルバー・ルール)

イエス様は、「**人からしてもらいたいことは何でも、あなたがたも同じように人にしなさい**」と言われました。つまり、「自分にしてほしいことを、人にもしなさい」という教えです。これと似た教えは、キリスト教以外の他の宗教にも見られるものです。例えば、イエス様と同時代のユダヤ教では、律法学者のヒレルという人がこう言ったそうです。「**あなた自身にとって憎むべきことは、あなたの隣人にもするな**」。またイスラム教のマホメットはこう言ったそうです。「**自分が人から危害を受けたくなければ、誰にも危害を加えないことである**」。さらに儒教の孔子はこう言ったそうです。「**己の欲せざるところ、他に施すことなかれ**」。

これらはいずれも、イエス様の教えとよく似ていますけれども、イエス様の教えよりも消極的な印象です。イエス様が「自分にしてほしいことを、人にもしなさい」と人に「良いこと」をするようにと教えているのに対して、他の宗教の教えは「自分にしてほしくないことは、人にもするな」というように、人に「悪いこと」をしないようにと教えています。イエス様は、「良いこと」をするようにと積極的であるのに対して、他の宗教の教えは、「悪いこと」をしないようにと、どちらかという消極的です。

イエス様の「自分にしてほしいことを、人にもしなさい」という教えが、黄金律(ゴールデン・ルール)と呼ばれるのに対して、「自分にしてほしくないことは、人にもするな」という教えは、白銀律(シルバー・ルール)と呼ばれるそうです。しかし私は、イエス様の黄金律(ゴールデン・ルール)のほうが積極的で、白銀律(シルバー・ルール)のほうが消極的だから、イエス様の教えのほうが良い教えだと言おうとしているわけではありません。私たちは、日常生活の中で、特に家庭生活の中で、子どもたちに教える時は、「自分にしてほしくないことは、人にもするな」という白銀律(シルバー・ルール)を教えることのほうが多いのではないのでしょうか。それは決して悪いことではないと思います。「自分にしてほしくないことは、人にもしない」ということは、とても大切なことです。これを実行すれば、多くの人間関係の問題や犯罪は確実に少なくなります。人に迷惑

をかけない、人の嫌がることをしないということは、社会的な平和にとって、とても大切なことだと思います。

2. これが律法と預言者です

しかしイエス様はあえて、「自分にしてほしくないことは、人にもするな」という教えではなく、「自分にしてほしいことは、人にもしなさい」と教えられました。しかも、「**これが律法と預言者です**」と言われました。「律法と預言者」というのは、旧約聖書全体を意味する言葉です。つまりイエス様は、旧約聖書全体の教えは、一言で言えば、「自分にしてほしいことは、人にもしなさい」という教えにまとめることができると言われるのです。

使徒パウロもローマ人への手紙の中で、こう言いました。「**他の人を愛する者は、律法の要求を満たしているのです。『姦淫してはならない。殺してはならない。盗んではならない。隣人のものを欲してはならない』という戒め、またほかのどんな戒めであっても、それらは、『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』ということばに要約されるからです。愛は隣人に対して悪を行いません。それゆえ、愛は律法の要求を満たすものです」(ローマ 13:8-10)**。旧約聖書の中で、神様は様々な律法を与えていますが、それは「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という言葉にまとめることができるというのです。つまり旧約聖書が教えていることは、一言で言えば「愛」なのです。神様を愛し、人を愛することを、旧約聖書は教えているのです。神様が、私たち人間に求めていることは、「愛すること」なのです。では「愛」とは、具体的に何なのでしょう。人を愛するとは、具体的にどういうことなのでしょう。イエス様は、「自分にしてほしいことを、人にもすること」、それが人を愛することであると教えているのではないのでしょうか。

3. 黄金律の限界！？

しかし私は、「自分にしてほしいことを、人にもすること」が、本当に人を愛することなのだろうかという疑問もあります。例えば、私はコーヒーを飲む時、ミルクだけを入れて飲むのが好きです。ですから誰かが私にコーヒーを淹れてくれる時は、ミルクだけを入れてほしいと思うわけです。しかし他の人の中には、コーヒーを飲む時、何も入れないでブラックで飲むのが好きな人もいます。その人に対して、私がコーヒーにミルクを入れて飲むのが好きだからといって、その人にもミルクを入れてコーヒーを渡したらどうでしょうか？それは果たして愛なのでしょう。「自分にしてほしいことを、人にもする」ということが、時にはお節介や余計なお世話、価値観の押し付けになってしまうのではないかなと思うのです。なぜなら、「自分にしてほしいこと」は、人それぞれ違うからです。私が人にしてほしいことは、必ずしも他の人もしてほしいとは限らないからです。

また世の中には、自虐的な行動を好む人もいます。自分を苦しめたり、痛めつけたりすることが好きな人がいます。そういう人がもし、このイエス様の黄金律（ゴールデン・ルール）を自分に適用したら、大変なことになります。自分が人から苦しめられたり、痛め

つけられたりすることが好きだから、人のことも苦しめたり、痛めつけたりして良いということになってしまいます。

そう考えると、イエス様の黄金律（ゴールデン・ルール）よりも、他の宗教が教えたり、私たちが子どもたちに教えるような白銀律（シルバー・ルール）のほうが、現実的で、問題や揉め事は起こらないのではないかと考えてしまいます。「自分にしてほしいことを、人にもして」、的外れなお節介や余計なお世話、価値観の押し付けになるぐらいなら、「自分にしてほしいくないことは、人にもしない」という消極的な姿勢のほうが、問題も起こりにくく、無難なのではないかと考えてしまいます。

4. 黄金律の真の意味を求めて

イエス様は果たして、本当に、的外れなお節介や余計なお世話、価値観の押し付けになるような危険性のある教えを、ここで教えられたのでしょうか？イエス様の教えにも限界があるということなのではないのでしょうか？イエス様に限ってそんなはずはないと思います。きっとイエス様がここで教えようとしていることは、もっと別の所にあるのではないかと思います。

そう思って、ギリシヤ語の原文を改めて読んでみました。そこで分かったことは、イエス様はここで、「何をするか」ではなく、「誰がするか」ということを強調しているということです。私たちは誰でも、「人からしてもらいたいこと」があります。それは一つや二つではなく、多くあります。夫や妻にしてもらいたいこと、親や子どもにしてもらいたいこと、上司や部下にしてもらいたいこと、先生や生徒にしてもらいたいこと、兄弟や姉妹にしてもらいたいこと、友だちにしてもらいたいこと、牧師や信徒にしてもらいたいこと、ああしてほしい、こうしてほしいということが、私たちには山ほどあります。しかし、そのしてほしいことを「誰がするのか」が問題なのではないかと思います。そのしてほしいことを、「他の人」に求めていくのか、それとも「自分」がするのかということイエス様は教えようとしているのではないかと思います。ギリシヤ語の原文を見ると、「人々があなたがたにすること」と「あなたがたが人々にすること」が対比されているのです。つまりイエス様はここで、「人があなたがたにすることを求めていくのではなく、あなたが人にしていきなさい」ということを教えているのだと思います。もっと言うなら、人に求めて生きるのは止めなさい、人に与えて生きなさいということを知っているのだと思います。

人に求めて生きる生き方は、不平・不満しか生まれません。夫や妻が、お互いにああしてほしい、こうしてほしいと求めてばかりいるから夫婦喧嘩が絶えないのです。親が子どもに、ああなってほしい、こうなってほしいと求めてばかりいるから子どもは苦しくなって親に反抗するのです。上司が部下に、ああしろ、こうしろと命令ばかりするから部下は上司を尊敬しなくなるのです。牧師や長老が信徒に、ああなってほしい、こうなってほしい、あれをしなさい、これをしなさいと求めてばかりいると信徒は疲れて教会から離れて

いくのです。私たちは、人に求めれば求めるほど、その関係は壊れていくのではないでしょう。イエス様はここで、人に求めていくのではなく、人に与えていく生き方を教えているのではないのでしょうか。

使徒パウロはある時、エペソの教会の長老たちにこう言いました。「私は、人の金銀や衣服を貪ったことはありません。あなたがた自身が知っているとおり、私の両手は、自分の必要のためにも、ともにいる人たちのためにも働いてきました。このように労苦して、弱い者を助けなければならぬこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです」(使徒 20:33-35)。パウロは、教会から給料を求めず、自分で天幕作りの仕事をして、自分の生活や同労者の生活を支えました。それは、イエス様の「受けるよりも与えるほうが幸いである」という教えがあったからだと言います。しかし、新約聖書の中にあるイエス様の言葉のどこを探しても、「受けるよりも与えるほうが幸いである」という言葉は、出てこないのです。おそらくパウロは、イエス様の「自分にしてほしいことを、人にもしなさい」という黄金律(ゴールデン・ルール)を、「受けるよりも与えるほうが幸いである」と言い換えて表現したのではないかと思います。ですから、「受けるよりも与えるほうが幸いである」ということが、黄金律(ゴールデン・ルール)の中心的なメッセージなのではないかと思います。つまり、人に求めて生きるのではなく、人に与えて生きること、それこそが愛であり、幸せな生き方であり、聖書の中心的な教えであるということではないのでしょうか。

おわりに

イエス様は、この黄金律(ゴールデン・ルール)を、身をもって実行された方です。真の神であり、真の人であるイエス様が、私たち人間に求めていることは、「愛すること」です。神様を愛すること、人を愛することです。イエス様は、私たちに御自身を愛することを求めておられます。しかしイエス様は、求めるだけでなく、与えられました。私たちに御自身を愛することを求めているからこそ、御自身が私たちを愛されました。私たちの罪のために、私たちが神様の裁きと呪いから救われるために、十字架で御自身の命を与えられました。イエス様は、私たちに愛を求めているからこそ、私たちを愛されたのです。イエス様は、求めるだけでなく、与えられたのです。

私たちは、人に求めるばかりの生き方では、その関係は壊れてしまいます。相手を苦しめるだけであり、不平・不満が生まれるだけです。私たちは、人に求めるばかりの生き方では、決して幸せにはなれません。「受けるよりも与えるほうが幸い」なのです。人に求めて生きるよりも、人に与えて生きるほうが幸いなのです。

では、私たちは誰にも一切求めてはならないのでしょうか。私たちは与えるだけなのでしょうか。イエス様は、今日の聖書箇所直前の7:11で、こう言っておられます。「天におられるあなたがたの父は、ご自分に求める者たちに、良いものを与えてくださらないことがある

でしょうか」。私たちには、求めてよい方がいるのです。それは、天におられる私たちの父である神様です。神様には、私たちは求めて良いのです。むしろイエス様、「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます」(マタイ7:7)と言われました。イエス様は、神様には大いに求めるようにと言われるのです。私たちは、神様に求めず、人に求めるからこそ、あらゆる関係が壊れていくのではないのでしょうか。神様は、イエス様を神であり、救い主であると信じる人の求めに答えてくださいます。どうぞイエス様を信じて、私たちが求めるべき方を持ってください。そして、人に求めて生きるのではなく、神様に祈り求めて生き、人に求めて生きるのではなく、人に与えて生きる生き方を新しく始めてみてはいかがでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、あらゆる関係において、人に期待し、ああしてほしい、こうしてほしい、ああなってほしい、こうなってほしいと求めてばかりです。そのため、不平・不満が生まれ、相手を苦しめ、関係が壊れることもしばしばです。どうか、私たちのこれまでの過ちをお赦しください。どうか私たちが、イエス様を信じて、天におられる父なる神様を求めて生きることができるよう。そして人に求めて生きるのではなく、人に与えて生きることができるよう。どうかあなたの力によって、私たちを変えてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。